

[ ブーケ ]

# bouquet



## 山田和樹 Kazuki Yamada

### 世界を駆ける指揮者が語る

ベルリンを拠点に国内外で活躍されている若きマエストロ、山田和樹さん。

クラシック音楽の本場ヨーロッパのみならず、日本でもオーケストラや合唱などの分野で幅広く活躍し、たくさんのステージから音楽を届けています。また、令和3年度から使用される教育芸術社の中学校用教科書『中学生の音楽』の「指揮をしてみよう!」のコーナーにもご登場いただいています。今号では、山田さんが音楽に寄せる思いや、このコロナ禍でのお考えなど、さまざまに語っていただきました。

### 想像力を働かせて遊んだ子ども時代

**bouquet [ブーケ] 編集部 (以下、b) :** 山田さんは現在、ベルリンを拠点に国内外で活躍です。いつ頃から音楽を始められたのですか？

**山田和樹 :** 子どもの頃に通っていた幼稚園のカリキュラムの中に、木下式音感教育法が取り入れられていたことがきっかけです。ですが、両親とも音楽家ではなく、僕に特に音楽を勉強させようとしたわけではありません。その幼稚園は文武両道のさまざまな活動を行っていたので、総合的によさそうだと思って選んだようです。

**b :** 小学生の頃は、どのように音楽と向き合っていましたか？

**山田 :** 歌うことは好きでしたが、ピアノの練習は嫌いでした。弾くことは楽しくても、練習は嫌だね。意識が変わったのは、小学4年生の頃です。全然練習しないものだから、発表会で大失敗してしまいました。そのとき「このままではいけない」と思い、練習するようになりました。すると、ちょうど習っていた『ソナチネ アルバム』の中でも、ハイドンやベートーヴェンの曲を弾けるようになってきた自分を「すごいじゃん」と思えて、自信につながったことを覚えています。

**b :** ご自分を、どのような子どもだったと思いますか？

**山田 :** 僕は一人っ子で、想像力を働かせて遊ぶような子どもでした。友達に誘われて外で遊ぶこともありましたが、一人で自宅にいることも多かったですね。特に何もない場所で親を待つ経験もありましたから、その場でさまざまなことを想像して楽しむわけです。そういう術はいまだに自分の中に生きています。「今からホテルの一室に1か月缶詰になりなさい」と言われても、僕は飽きずにいられる自信があります。兄弟がいたら、そういう場面

はあまりなかったんじゃないかな。ただし、兄弟げんかをしたことがないので、弱い面はあると思います。周りに敏感で、この人は自分にとって敵か味方かを肌で感じようとし、第六感や第一印象など、感覚を大事にしています。そして僕が一人っ子でなければ、おそらく指揮者にはなっていなかったでしょう。

**b :** 学校生活を振り返ったとき、思い出深いのはいつ頃ですか？

**山田 :** 特に思い出があるのは、高校生の頃です。僕は吹奏楽部で指揮をしていました。僕が通っていた高校は自由な校風で、一応は進学校なのに、3年間は思い切り遊んで青春し、それから1年間勉強してよい大学に入る生徒も多かったものですから、「うちは4年制高校だ」と友達と話すこともありましたね。先生が生徒の活動に一切口を出してはならないという校則があったので、吹奏楽部も教師は指揮をせず、生徒が、自分たちの中から指揮者を選ぶのです。指揮者になって、思いついたことをすぐに実行できる環境でしたが、がんばっただけ報われることもあれば、そうでないこともありました。自分がアレンジした曲を自分で指揮をすることもあったりして、それはエキサイティングな日々でした。たくさん泣いて笑って、充実した高校生活でした。自由な学校だったからこそ、自由をはき違えてはならないこと、自分の行動には責任を伴うことを学べたと思います。もちろん大学も、音楽を学ぶ環境として最高に充実していましたが、

### 優勝で予感した「その先の過酷さ」

**b :** 子どもの頃、どのような気持ちで音楽をなさっていましたか？

**山田 :** 音楽をやる人って、大体2つのパターンに分かれると思うんです。一つは聖職者みたいな人で、ほんとうに音楽のために生きているような人。



もう一つが邪な人(笑)。僕は後者です。例えば、学校の教室でピアノを弾けば友達に「わあっ！」と言ってもらえる。そこから、うれしいというエネルギーが湧いてきて、みんなに好かれたいという気持ちから音楽をやっている面もありました。ただし、指揮者を目指そうと思ったのは、周囲とは関係なく、自分のためでした。

**b:** 指揮者になることを意識したきっかけは何ですか？

**山田:** 決定的だったのは、高校2年生の終わり頃、機会があってオーケストラを指揮したことです。僕の中では、ビッグバンのような出来事でした。本格的に音楽の勉強を始めたのはそれからです。

**b:** そして現役で東京藝術大学に入学されたんですね。現在の華やかなご活躍までに、転換点がありましたか？

**山田:** はい、ブザンソン国際指揮者コンクールでの優勝です。1度目は通過せず、2度目の挑戦でした。あのコンクールは強制的に自分と戦う場であり、自分を鍛えてくれたと思っています。コンクールの順位付けは数値として出てこないのので、「これぐらいなら大丈夫」ということが一切ない。ですから、最大の敵である自分に打ち勝つために、追い詰められる中で必死にがんばっていくわけです。日常生活においては、まずない時間でした。

**b:** 優勝されてどのように感じましたか？

**山田:** 優勝しても、気持ちが楽になることはありませんでした。その先にある過酷さを予感できた経験です。そして、ブザンソンでのコンクールの1週間が、僕を強くしたのは確かです。それにコンクールでの優勝がなければ、僕は今こんなに多くの海外のオーケストラを指揮できていないでしょうし、たくさんの方々との出会いもなかったと思います。大きな転換点でした。

## 震えこそ音楽

**b:** 現在、世の中ではリモートワークや演奏も含め、オンラインでの試みが盛んです。山田さんは、音楽監督を務められている横浜シンフォニエッタのメンバーと、横浜市内の小・中学生および高校生を対象にウェブレッスンもされていますね。オンラインについて、どのようにお考えですか？

**山田:** オンラインや配信には、さまざまな可能性があると思います。しかし、まだ誰もがほんとうの活用法を分かっていない状況ではないでしょうか。きっと、使い方次第で飛躍的に「バズる」ことはあるでしょうし、教育面の効率化を図れるかもしれません。でもそう簡単にはいきませんよね。現実の世界だって、人は何百年と悩んで模索し続けてきたわけですから。僕はオンラインに関しては「人間が全てを使えっこない」と諦めている部分もあります。



**b:** 山田さんご自身も使用されているので、オンラインに積極的なのかと思いました。

**山田:** 僕のしていることは、闇に向かって石を投げているようなものですよ。やらないよりは、やったほうがいいかなと思って。どんな状況でも、人は絶対に動くべきで、諦めちゃいけない。闇に向かって石を投げることで、やめちゃいけないんです。これがどう未来につながるのかは、誰にも分かりません。

**b:** コロナ禍でオンライン学習が必要とされ、私たち教育芸術社でもコンテンツを作成してきましたが、まだまだ手探りの状態です。

**山田:** オンラインの世界をほんとうの意味で使いこなせるようになるのはずっと先でしょうね。でもきっとその頃には、オンライン以上のものができていますよ。これまでは、学校があるから教科書が手に入り、教科書があるから字を読んで、紙があるから字を書けた。そこにオンラインという便利な機能が入ってきた。しかし、僕を含めてほとんどの人が、ほんの一部の機能しか使っていないことでしょう。確かにオンラインはコロナ禍では必要なものですが、人は動かなくてはいけないのに、使い方によって人が動かなくなってしまうのも、その特性です。人が作ったものが人を追いつ越した、その最たるものがオンラインだと思います。

**b:** あらためて、このような世の中だからこそ見えてきた音楽のよさはありますか？

**山田:** やはり、生で聴く音楽のよさを実感しています。突き詰めれば、生の音楽とは「人と人が触れ合うこと」です。もちろん、人と人が一緒に演奏したり聴いたりすることもそうですが、例えばベートーヴェンの曲を聴くと、ベートーヴェンの魂が音楽を通してよみがえったように感じることがあります。まるでベートーヴェンと握手しているかのような感覚になったり。会ったことも見たこともないのに、彼の音楽を200年たった今でも聴くことができ、その魂を感じることができるのは、やはりすばらしいことです。

**b:** 音楽は時間を超えて人と人をつなぐのですね。

**山田:** そういう点から、演奏会はお墓参りと少し似ているかもしれませんね。過去の作曲家には会えないし触れられない。けれど音楽を通して、その人がいたことや魂を感じることはできる。そして、生きている人々が集って、触れ合える。音楽は人の仲介役をすることもありますし、人と音楽とは切っても切れない関係です。そして指揮者として願うのは、お客様に音楽の震えを感じていただきたいということです。楽器が震え、人の声が震え、

心が震える。その震えこそが音楽です。心の震えがある限り、人は大丈夫なのですから。

## 人が動くから美が生まれる

**b:** プロの指揮者として活動する中で、モチベーションを維持するために、意識されていることはありますか？

**山田:** 仕事としてするべきことはしますが、それ以外に自分の気持ちが向かないときは、基本的に放っておきます。コロナウイルスの影響で、4か月間コンサートができなくなりましたが、その間何もしていませんでした。楽譜も開いていません。

**b:** 全くですか？

**山田:** はい。自分でもあきれるぐらい、1ページも開きませんでした。

**b:** 日頃、さまざまな国でコンサートをされていてご多忙なので、この機会に楽譜をたくさん読んでいらっしゃるものと想像しておりました。

**山田:** 僕自身も驚きました。時間ができたら、自分の音楽を希求する心が強く出てくるかなと思っていましたが、そんなことはありませんでした。「好きで音楽をやっているはずなのに」と不思議でしたが、音楽は自分の中にあるものでもあるので、僕の場合は無理せず向き合えばいいと思っています。

**b:** 山田さんにとって、音楽はどのようなものだと感じますか？

**山田:** 音楽って、ものすごく残酷な面もあるんです。よい音楽をつくれたり、よい音楽に出会えたりすると、「もっと」という気持ちが出てくる。でも突き



©Marco Borggreve

自分が「音楽をしたい」  
と思う気持ちは止められない。  
僕が音楽をする理由は  
「そこに音楽があるから」なんです。

詰めるほど、うまくなればなるほど、その感動からは遠ざかってしまうような側面がある。その厳しさがあるのに、万人に向けて開かれる愛のようでもある。嫌になっちゃう存在ですね。

**b:** 「よい音楽」とは、どのような条件をもつと思われ  
れますか？

**山田:** 人間のドラマや感情と直結していることかな。耳触りのよしあしは置いておき、その音楽に人間の美しさがあるかどうかなのではないかと思っています。例えば、現代音楽でさまざまな音が鳴り響いてめちゃくちゃな曲もあるけれど、そこに人間として生きている“醜さも含めた美しさ”があれば、よい音楽だと感じます。

**b:** おっしゃるとおり、過去に感動した音楽が、必ずしも完璧に整ったものではなかったと感じます。

**山田:** 最近いい意味で、自分はなんて無駄なことをしているのだらうと思ったことがありました。モナコで、モンテカルロ・フィルハーモニー管弦楽団のリハーサルをしていたときのことです。場所は屋外で、楽団員が全員必死に演奏していますが、全然足りないんですよ。当たり前だけれど、どんなに必死に音を鳴らしても、音は世界中には届きません。それを見ていて、僕たちはなんて無駄なことをしているのだらうと、ふと思ったんです。けれどもその「無駄なこと」は非常に大切で、その無駄なことに命を燃やしている姿は美しい。だから、そこに美が生まれるんです。

**b:** 美しさは人が生み出すのですね。

**山田:** 美があるからこそ人は動くという面もあるでしょうが、どちらかといえば、人が動くから美が生まれるんだと思います。だから人は動かなくてはならない。演奏すること、表現すること、求めること、何か食べることなど、人が行う全てが「動くこと」ですよ。養老孟司さんも「生きてりゃいいんだよ」なんておっしゃいますが、実際にそのとおりで、人は生きていること自体が美しいんです。命そのものが美。よい音楽は、必ず命と直結しています。バッハの音楽も現代音楽も、作曲家の命の一部であるから美しいのだと考えています。

## 自分の中にある音楽

**b:** 現在のコロナ禍で、お考えになることはありますか？

**山田:** 「不要不急か否か」ということが取り沙汰される中、あらためて考えたのは、「人にとって音楽は必要なのか」ということです。その結果、音楽は必要不必要を問うようなことではなく、本能レベルで必然なものだと思いました。ふだん僕たちの日常生活には音楽があふれていますが、自分の内側にも音楽は必ずある。現代社会は忙しいから、なかなか自分の中の音楽や音は聞こえてこないけれど、この自分の音楽に耳を澄ますことは、自然の音に耳を傾けることとよく似ています。観念的ではありますが、自分の音に向き合うとき、人間は自然の一部に戻るのではないのでしょうか。



**b:** 学校現場では、大きな声で歌えなかったり演奏できなかったり、いつもどおりの活動が難しい状況ですが、そんなふうにも子どもたちも自分の音に向き合うことができたなら、すてきですね。

**山田:** そうですね。その一方で僕の立場としては、自然や自分の中にも音楽があるのなら「無理して音楽することないじゃん」という結論に至ってしまい、「職業音楽家」という自分の存在を否定することにもつながってしまうんですね(笑)。

**b:** ですがやはり、人類が長きにわたって音楽を残してきたことは、かけがえのないことでし、それをつないでいく音楽家の存在は重要だと思います。山田さんの音楽をする原動力は、どこから生まれてくるのでしょうか？

**山田:** 自分が音楽をするのは、ただ「生きているから」です。音楽は、ものとしては必要ないかもしれないし、職業としても絶対的には必要でないでしょう。けれど、自分が「音楽をしたい」と思う気持ちは止められない。登山家が山に登る理由を「そこに山があるから」と言うように、僕が音楽をする理由は「そこに音楽があるから」なんです。

**b:** 音楽は、なぜ人をひき付けるのでしょうか？

**山田:** 人間の中にもともと音楽があるからでしょう。そして、僕たちの根底にある音楽が、他の人の音楽と共振共鳴し、「感動」という形になって、表れるのだと思います。例えば「Symphony (交響曲)」とはよくできた言葉で、響きが変わることを意味します。音と音が響き合ったときに、人は細胞レベルで感動を得ることがありますよね。その理由は分かりませんし、音楽を追いかけても、答えが見つからないことばかりです。常に「何のために僕は音楽をやっているのか」と自問自答です。しかし、理由の分からないものや、答えのないものって美しい。だから音楽って、やめられないんですね。



## 山田和樹(やまだ・かずき) 指揮者

2009年第51回ブザンソン国際指揮者コンクールで優勝。ほどなくBBC交響楽団を指揮してヨーロッパ・デビュー。同年、ミシェル・ブラッソンの代役でバリ管弦楽団を指揮して以来、破竹の勢いで活躍の場を広げている。2016/2017シーズンから、モンテカルロ・フィルハーモニー管弦楽団芸術監督兼音楽監督(2024年8月まで任期延長/2020年9月18日発表)、2018/2019シーズンからバーミンガム市交響楽団の首席客演指揮者に就任。日本では、日本フィルハーモニー交響楽団正指揮者、読売日本交響楽団首席客演指揮者、東京混声合唱団音楽監督兼理事長を務める他、学生時代に創設した横浜シンフォニエッタの音楽監督としても活動している。

2016年には、実行委員会代表を務めた「柴田南雄生誕100年・没後20年記念演奏会」が、平成28年度文化庁芸術祭大賞を受賞。これまでに、ドレスデン国立歌劇場管、バリ管、フィルハーモニア管、ベルリン放送響、バーミンガム市響、サンクトペテルブルグ・フィル、チェコ・フィル、ストラスブール・フィル、エーテボリ響、ユタ響など各地の主要オーケストラでの客演を重ねている。東京藝術大学指揮科で小林研一郎・松尾葉子の両氏に師事。メディアへの出演も多く、音楽を広く深く愉しもうとする姿勢は多くの共感を集めている。ベルリン在住。オフィシャル・ホームページ: <https://kazukiyamada.com/>





上野耕平の  
crossing [クロッシング]

第8回

夢の超特急（E5系）



主に東北新幹線を走るE5系。  
最高速度320 km/hは日本  
最速の営業速度だ。とんでもな  
い速度で進むE5系。それでも  
車内ではそんなことも感じず  
にゆっくりとくつろげる日本  
の技術に脱帽する。車両の開発  
はもちろん、日々の保守点検も  
ばっちりだ。

そんな新幹線は、360 km/h  
の営業運転に向けて新しい試験  
車両でのテストが始まっている。  
現行のE5系でも長い約15mの  
ロングノーズがさらに伸び、約  
22mに。空気や騒音との闘いも  
より厳しくなる。技術の進歩が  
ますます楽しみだ！

文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

第28回日本管打楽器コンクール サクソフォーン部門において、史上最年少で第1位ならびに特別大賞を受賞。学生時代にCDデビューを果たす。2014年第6回アドルフ・サククス国際コンクールにおいて、第2位を受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォーンの可能性を最大限に伝えている。現在、演奏活動のみならず「題名のない音楽会」、「報道ステーション」等メディアにも多く出演している。第28回出光音楽賞受賞。昭和音楽大学の非常勤講師。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。

Information

◇CD『アドルフに告ぐII』（日本コロムビア）[3,000円＋税/COCQ-85478] が好評発売中。〈収録曲〉藤倉大『ブエノ ウエノ』（初録音）、逢坂裕『ソプラノサクソフォンとピアノのためのソナタ エクスタシス』（初録音）、デューリック『ソナタ 嬰ハ調』、マルタン『バラード』、トマジ『バラード』

◇上野耕平を中心としたサククス・カルテット「The Rev Saxophone Quartet」によるCD『Fun!』（日本コロムビア）[2,500円＋税/COCQ-85442] が好評発売中。〈収録曲〉J.S.バッハ（伊藤康英編）『G線上のアリア』、ビゼー（萩森英明編）『カルメン幻想曲』、稲森安太己『ふるさと狂詩曲』他

編集部メモ

E5系は、東北新幹線と北海道新幹線の区間（東京～新函館北斗）を走る。  
このE5系を使用する新幹線の中でも「はやぶさ」は、最高速度320km/hで運行する。  
高速運転に伴う騒音や振動を防止するために最新技術や装置が用いられているうえ、  
車内設備も充実しているのが特徴である。客室とデッキ内に防犯カメラを設置することによるセキュリティの強化、電動車いすに対応した大型トイレや多目的室の設置のほか、  
ユニバーサルデザインも導入されている。



# One day, ワンデー ワンモーメント one moment

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ

Photo・Text：Tomoko Hidaki

10 枚目

## 祈り

ある春の日の早朝、真っ暗な道を運転し、一本の桜を見に来た。山梨の朝の空気は奥行きのある静けさで、しんと冷たく透き通っている。聞こえるのは自分の呼吸音とダウンジャケットの衣擦れの音だけ。待つ、という行為に不思議と心満たされながら、見上げる空は刻一刻と暗い群青から薄い桃色へと移っていく。

世界中での疫病大流行。その中で息を殺して待つ気持ちには、桜の向こうに必ず昇る太陽を待つよりも不安かもしれないが、前を向きたい。来年は、音楽と笑顔に満ちた暖かい春でありますように。





## ヒダキトモコ

フォトグラファー。日本写真家協会(JPS)、日本舞台写真家協会(JSPS)会員。  
米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。人物写真とステージフォト  
を中心に撮影。ジャケット写真、雑誌の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭の  
オフィシャル・フォトグラファー。官公庁や経済界の撮影も多数。  
<https://hidaki.weebly.com>



次代につなぐ

07

# の校長先生講話



菊本和仁（きくもと・かずひと）  
学校法人三浦学園 日本音楽高等学校 校長・評議委員  
全日本音楽教育研究会中学校部会（第13代会長）  
東京都中学校音楽教育研究会（第18代会長）  
東京都中学校吹奏楽連盟 顧問

本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第7回は、現在も私立の高等学校で校長を務める菊本和仁先生が、墨田区立向島中学校で話した朝礼講話です。生徒を見据え、その時々状況や環境に合わせて、伝えるべきことを考えるという菊本先生。お届けするのは、中学生だけでなく、大人でも勇気をもらうことができるお話です。

また今号では特別に、菊本先生の校長講話に込める思いや考えについても伺いました。

第7回 菊本和仁 先生 元 墨田区立向島中学校 校長  
現 日本音楽高等学校 校長

## ファーストペンギン

おはようございます。

一昨日の夜、車を運転しながら何気なく聞いていたFM ラジオ放送（J-WAVE）から流れてきた「ファーストペンギン」という話が気に留まりました。皆さんもよく知っている可愛いペンギンですが、ペンギンはどこかに移動するとき、まず群れの中の一匹が動き、その後に残りの群れが従って動くという習性があるそうです。南極近くに暮らすペンギンたちは、生きていくためには海に飛び込んで食料となる魚を捕る必要があります。ところが、海にはシャチやアザラシ、オットセイなどの肉食獣がペンギンを狙って水中で待っている危険性があります。魚は食べたい。でももしかしたら敵がいて食べられてしまうかもしれません。ペンギンはいつも氷の上で右往左往しています。

そんなペンギンの中で「我に続け!」とばかりに飛び込むペンギン、それが「ファーストペンギン」です。アメリカでは、このように勇気をもって未知の世界や仕事に飛び込むことを「ファーストペンギンスピリッツ」というそうです。この最初に飛び込むペンギンは、群れのリーダーではなく、普通のペンギン、そして毎回違うペンギンなのだそうです。



講話の前に水黒板にタイトルを書く菊本先生。講話が終わる頃、タイトルは自然に消える





日本音楽高等学校では、毎秋生徒たちによる総合的な学習上演発表として『サウンド・オブ・ミュージック』を行っており、2020（令和2）年で18年目となる。教員による振付や演出は毎年変わり、舞台照明や大道具なども生徒が手がける。  
写真は2018（平成30）年10月のステージ

このことは、私たち人間にも通じるところがあるのではないかと思います。何か新しいことにチャレンジするときは、ファーストペンギンのように「行くぞ!」「やるぞ!」といった決意が大事だということです。自信がないから発言しなかったり、行動しなかったりする人はたくさんいると思います。怖がって新しいことにチャレンジしなければ、進歩は永遠にありません。自信は物事を成し遂げていく、チャレンジした結果、ついてくるものだと思います。

皆さんは現在中学生。これからの長い人生には、この「ファーストペンギン」の精神をもってチャレンジしなければならないことがたくさんあると思います。そんな時、今日話を思い出してください。そして、様々な立ちちはだかる障害から逃げないで、まず一歩前にふみだしてみましよう。

さて、朝晩気温が下がり、空気が乾燥してきました。風邪やインフルエンザにかからないよう十分に気をつけ、うがいや手洗いを励行しましょう。また、今週で11月が終わり、12月（師走）になります。毎年12月になると「今年の重大ニュース」や「今年を表す漢字一字」が発表されますが、皆さんもこれを機会に自分自身どんな年だったのか振り返ってみましよう。



### ひとロメモ

ペンギンを漢字で書くとどのような字になると思いますか？

正解は、「人鳥」。人に鳥と書いてペンギンと読むのだそうです。

ペンギンの立ち姿が人間に似ていることから

この字になったと言われています。

ちょっと怖い感じもしますが……。

（平成23年11月28日、墨田区立向島中学校における校長朝礼講話「ファーストペンギン」より）



## Interview

## 菊本和仁先生

校長講話に対するお考えについて、  
お話を伺いました。

**菊本和仁**：この「ファーストペンギン」の話をした墨田区立向島中学校は、私が最後の校長を務めた年、平成 25 年 3 月に閉校となりました。その際、私の話した 3 年間分の校長講話を冊子にまとめて、全校生徒に贈りました。

**bouquet [ブーケ] 編集部 (以下、b)**：すてきなプレゼントですね。これまでの講話を文章で記録されているのですか？

**菊本**：はい。きっかけは、私が管理職を務めた 3 つの学校の全てに、難聴通級学級があったことです。朝礼の際には、耳の不自由な生徒が読めるように校長の講話を文章にし、パソコンを使用してスクリーンに映し出し、言葉に合わせてスクロールしていくのが日常的でした。さらに入学式や卒業式など大きな行事のときには、難聴の生徒たちを支援する団体が式典をサポートしてくださっていました。このような環境にあったことから、講話は必ず文章に毎回まとめています。

**b**：1 つの講話を書くためには、どのぐらいの時間を要しますか？

**菊本**：講話をする日は朝の 3 時半頃に起きて、5 時半頃までに書き上げます。

**b**：その日に書かれるのですね。

**菊本**：毎回タイムリーな話をしたいので、必ずその日に考えます。日常生活の中で、ラジオやテレビ、新聞や雑誌などから、感動したことや感心したことをいつも手帳にメモしており、講話に生かしています。これは今でも続けている習慣です。

**b**：講話を書くときに注意されていることはありますか？

**菊本**：話のポイントを具体的に絞るように意識しています。タイトルは視覚的に分かりやすくし、文章の分量は A4 用紙 1 枚完結、読み時間が約 5～6 分程度のもの。話すときは、水黒板（筆に水を含ませて書くと浮き出て、5 分ほどで消えるボード）を近くに置き、タイトルを書いてから話し始めます。欠席した生徒や保護者の方にも周知するために、学校の公式ホームページにも掲載しています。

**b**：日本音楽高等学校のホームページでは、先生の書かれた過去 4 年間の校長講話が閲覧できますね。

**菊本**：この学校では芸術系を学ぶ生徒たちが多いので、験担ぎに関する講話をよくします。また、舞台芸術コースの先生に対しては時間に関係なく「おはようございます」と挨拶するのですが、なぜ芸能業界や音楽業界にはこのような習慣があるのかという講話をしたこともありますよ（2017 年 4 月 8 日全校朝礼校長講話「おはようございます」）。

**b**：生徒さんたちの反応はいかがでしたか？

**菊本**：「へえー！」と感心してくれました。生徒たちの興味をひく講話であることが大切だと考えています。校長講話が、ぜひ生徒の心に響いてほしいと願っています。



日本音楽高等学校。全日制女子校で 4 つのコース（音楽コース、幼児教育コース、バレエコース、舞台芸術コース）がある。同校ではピアノ科の教員と生徒が校歌を連弾し、その録音が予鈴になっている。菊本先生のアイデアで、予鈴を聞いて移動を始めると本鈴でちょうど着席ができるという



学校入口の掲示板「学校長より」にも校長講話が貼り出されている。掲示物の「九月のひと言：一意専心」と、校長室の入口の「夢への扉」は、どちらも書道を趣味としている菊本先生の書いたもの



校内の一角





[ワールドレポート]

# World Report

## 太古から伝わる物語

アボリジニのアートに魅了されて



Mayumi Uchida

オーストラリアに在住しながら、アボリジニの人々と多くの時間をともにし、彼らのアートの魅力を広めてこられた内田真弓さん。そのダイナミックな人生には、未知の世界に飛び込む勇気と、“大切なもの”を見失わない心の強さが秘められています。

生きるための知恵を次世代へ伝えてきた“アボリジナルアート”の、悠久の物語に想いを馳せたとき、アートとは何か？という問いに対するヒントが見つかるかもしれません。

内田真弓（うちだ・まゆみ）

アボリジナルアート・コーディネーター。航空会社の客室乗務員を経て日本語教師として1994年に渡豪。帰国直前にアボリジナルアートと出会い、メルボルンのアートギャラリーに初の日本人スタッフとして勤務する。その後2000年に独立してフリーランスに。現在は1年の3分の1以上をアボリジニ居住区で過ごし、アートの魅力を日本へ発信している。  
<https://www.landofdreams.com.au>

### アート・コーディネーターとして

不思議な魅力を秘めた国、オーストラリア——日本の22倍もの広大な面積をもつこの大陸は、地域ごとにさまざまな表情があり実にユニークです。そんなオーストラリアで暮らすようになって28年目を迎えました。

故郷の茨城を18歳で離れ上京。航空会社の客室乗務員として働いた後、26歳でたった2つのスーツケースと『地球の歩き方』だけを抱えてオーストラリアへ渡りました。それから28年、オーストラリアの先住民アボリジニの人々とたくさんの時間を共有する人生を歩んできました。

アボリジニとは、5万年とも6万年ともいわれる太古から、狩猟採集生活をしながらオーストラリア大陸を自由に移動してきた人々のことです。彼らが描く“アボリジナルアート”は、地上に現存する絵画の中で最も古い伝統を誇るといわれています。少し前までは先住民の珍奇な美術といったイメージが根強かったのですが、いまや現代アートとして世界各地の著名な美術館でも所蔵作品に加えられるようになりました。

私はそのアボリジナルアートのコーディネーターとして活動しています。メルボルンの自宅から2500キロ離れたオーストラリアの中央砂漠へ飛び、才能あるアボリジニの画家の作品を発掘し、日本各地の企画展で紹介しながらプロデュースを行います。そのため、長年オーストラリアと日本を行ったり来たりする生活を送ってきました。



アート制作を見守る内田さん



赤土の大地が広がるアボリジニ居住区までの道のり

## 運命の出会い

「あなたはアボリジナルアートを学びたくてオーストラリアにやって来たの？」——よくこのように尋ねられますが、実はそうではありません。もともとはボランティアの日本語教師として1年滞在の予定で渡豪したのです。活動を終えて帰国を決めていた私は、お土産を買うためにメルボルンの市内を散策していました。そのとき降ってきたにわか雨。傘を持っていなかった私は雨宿りができる場所を探して、とあるお店にずぶ濡れで飛び込んだのです。

そこはアボリジナルアート専門のギャラリーでした。不思議な絵画が壁いっぱいに展示されていたのですが、私にはいったい何が描かれているのか分かりません。お店の人に声を掛けられたらどうしようと、目を合わせないようにしながら店内をうろろろしていました。そんなとき、ギャラリーの奥に展示されていた大きな一点の作品に釘付けとなり、動けなくなってしまったのです。頭のとっぺんに雷が落ちてきたかのような、それは大きな衝撃でした。

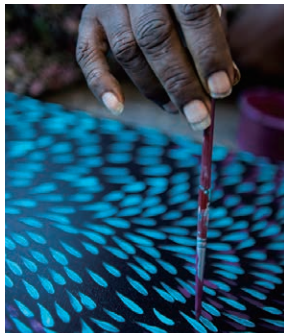
再びギャラリーを訪れた日、背後から一人の男性が語りかけてきました。「ここのアートについてどう思う？」という質問に対し、正直に知識がないことを伝え、彼はアボリジニについてのレクチャーを始めたのです。夢中で聞き入っていると閉店時間をとくに過ぎていてはなりません。

このエネルギーあふれたアートに囲まれて、心地よい空気に身を任せられたらなあ。レクチャーを聞きながら、そんなふうに思っていた私に、信じられないことが起こりました。「ここでアボリジナルアートを学んで日本に紹介してみない？」なんと彼はギャラリーのオーナーだったのです。私は帰国を取りやめてギャラリーに勤務することになりました。ここでアボリジナルアートを6年間みっちり学び、その後フリーランスとして独立し現在に至ります。



天才画家といわれたエミリー・ウングワレー氏

## 砂漠の真ん中で



繊細な筆使いで描かれるアート  
(グロリア・ベチャラ氏)

アボリジニには「読む」「書く」といった文字文化がなかったため、生きるために欠かせない情報や知恵は全て、踊りや歌、そして“絵画”によって次の世代へと伝承されてきました。

絵画といってもアボリジニの人々にとってアートという意識はなく、文字に代わるビジュアルな言語なのです。私たちには抽象的に見える文様であっても、実はとても具体的な水場の場所を示していたり、精霊たちが旅をした旅程であったりと、彼らにはどれもリアルな物語として次世代へ伝えるものです。それは現代においても変わることがありません。

私はこうした物語に深い関心をもつようになりました。絵画が生まれる現場をどうしてもこの目で見たくなり“住み込み調査”を決意。オーストラリア





制作工房にて

それでも、5万年の間継承されてきた物語がキャンバスにみるみる描き上げられていく様子を目の当たりにすると、その興奮は言葉になりません。彼らにとって絵を描くことの重要性は芸術作品をつくることではなく、自分たちと大地との関わり、その喜びを表現するプロセスなんだということが理解できたとき、アートの概念がひっくり返るような感覚を味わいました。

## あるがままにアートを感じて

アボリジナルアートは、大まかに4つ——北部・アーネムランドの樹皮画、中央・西砂漠地帯のアクリル画、北部準州の工芸品、南東部の現代美術（都市部で暮らすアボリジニがアイデンティティを表現した作品）——に分類されます。

私の専門は2つ目のアクリル画で、細かい点描で表現される“ドットペインティング”という技法が特徴です。もともと大地の砂の上と自分たちの身体上に岩絵具で模様を描いてきたものですが、1970年代からキャンバス地とアクリル絵の具が用いられるようになり、アートとして広く公開できるようになりました。



“ドットペインティング”といわれる技法



展示会用の作品を選ぶ

アボリジナルアートの鑑賞に法則は一つもありません。頭で学習することに慣れている私たちは、芸術や美術についても「こう解釈するべき」「こう理解するべき」と誘導されがちですが、実際に描いているアボリジニの人々はそのような評価などまるで考えずに制作しているのですから。具象画だとか抽象画だとか、そういった意識もなく描いているのです。ですので、鑑賞する側ももっと自由でよいと思うのですが、いかがでしょうか。

現代社会は情報が多すぎて、常にそれらに追われている毎日です。何がほんとうによいのか分からなくなりやすいからこそ、自身の審美眼を信じたいと強く感じます。時代の流れとともにどこかに置き忘れてしまった「こころの忘れもの」を、私はアボリジニの人々からたくさん気付かせてもらいました。

過酷な砂漠で生きるためのバイブルでもあったアボリジナルアート。あるがままに感じるこそが、実はアーティストが最も伝えたいことなのかもしれません。

（文・写真：内田真弓）文中の地名等は筆者の表記にそらえています。

- 02 [ 特別企画 / Interview ] 山田和樹〜世界を駆ける指揮者が語る
- 07 [ 連載 ] crossing 第8回 上野耕平
- 08 [ 連載 ] フォトエッセイ One day, one moment 10 枚目 ヒダキトモコ
- 10 [ 連載 ] 次代につなぐ 校長先生の講話 第7回 菊本和仁
- 13 [ 連載 ] World Report vol.9 アボリジニのアートに魅了されて



<https://www.kyogei.co.jp/>

## 編集後記

『bouquet[ブーケ]』No.10をご清覧いただき、ありがとうございます。

今号、特別企画としてご紹介するのは、国内外で活躍する若きマエストロ、山田和樹さんです。  
コロナ禍でコンサートや舞台が中止を余儀なくされる中、「音楽は不要不急だ」といわれる場面も少なくありません。

かつてない状況下でマエストロが見いだした音楽の根源にあるものとは――。

音楽に携わる多くの方々にお届けしたいインタビューです。

「校長先生の講話」は、最初に飛び込む勇気をもった“ファーストペンギン”のお話です。

墨田区立向島中学校で校長を務めた菊本和仁先生の、温かい言葉を紡いだ講話集の中から、とっておきの一編を掲載しました。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。

## staff

Art Direction & Design(表紙・本文): 中澤美羽 / 協力: COTTON CANDY

写真(中面インタビュー): STUDIO S+PLUS 島崎信一 / DTP: 清新社 / 印刷: 新日本印刷 / 製本: ヤマナカ製本